2011年（平成23年）
第44号
（8月15日）

平安月報

The HEIAN monthly report

発　行　所：立正佼成会　京都教会
発行責任者：渉外部長　宮地啓安
〒605-0041　京都市東山区三条蹴上
TEL (075)762-2211　FAX (075)762-2266

京都発！世界平和に向けて　　第２８回庭野平和賞授賞式　京都教会で開催

ＩＮＥＢ共同創設者スラック・シワラック氏に贈呈

７月２３日、京都教会において、公益法人庭野平和財団が主催して、第２８回庭野平和賞贈呈式ならびに記念講演、パネルディスカッションが、約１５０人の聴講者を集め開催された。例年は東京で贈呈式、京都で記念シンポジウムが行われていたが、今回は東日本大震災の影響で、贈呈式も京都で実施されることになった。

受賞者はタイの在家仏教徒で、ＩＮＥＢ（仏教者国際連帯会議）の共同創設者であるスラック・シワラック氏（７８）。同氏は４０年以上にわたり、仏教に根差した社会活動に努め、消費中心の開発に警鐘を鳴らし、貧困問題の解決や環境保全、教育にも力を注いできた。

贈呈式では、庭野平和賞委員会のキャサリン・マーシャル委員長による選考経過報告のあと、庭野名誉会長から賞状と顕彰メダル、賞金の目録がスラック氏に手渡された。 続いて、庭野名誉会長のあいさつ、近畿宗教連盟理事長の荒木師の祝辞、スラック氏の記念講演が行われた。

このあと、スラック氏、庭野平和賞委員会の呉在植委員、特定非営利活動法人ＪＩＰＰＯの中村尚司専務理事がパネリスト、関西学院大学の山本俊正教授がコーディネーターを務め、パネルディスカッションが行われ、東日本大震災後の社会構築のあり方、宗教者の役割などについて意見が交わされた。

同氏は記念講演で、「私たちに求められることは、文化に対する繊細な理解と政治への関心、そして社会にかかわりながら公益の問題に取り組み、権力の乱用がはびこる状況を指摘する勇気です」と指摘し、「資本主義や消費主義に中毒させられるのでなく、自らの貪欲を寛大さに、憎しみを慈愛に、迷いを智慧に変える。世界平和の実現には、自らの内に平和の種を育むことが欠かせない」と述べた。

庭野平和賞贈呈

挨拶（庭野名誉会長）

祝辞（荒木元悦師）

記念講演（シワラック氏）

パネルディスカッション

節電標語　最優秀賞決定

８月１０日、京都教会が会員から『節電標語』を募集していたが、多数集まった中から優秀作品の発表があった。最優秀作品には**「み教えも節電も　日々の努力が　実を結ぶ」**が選ばれた。

仕方なしにするのでなく、させていただくことがありがたい、と信仰生活と同じ気持ちで楽しく節電にも取り組めば、その努力は必ず実を結ぶだろう。

お知らせ（９月の教会行事）

９月	１日（木）	朔日参り	9：00～
	４日（日）	開祖さまご命日・日曜参拝日	9：00～
	１０日（土）	脇祖さまご命日	9：00～
		敬老会（シルバーフェスティバル）	12：30～
	１５日（木）	釈迦牟尼仏ご命日	9：00～
	２３日（祝）	秋季彼岸会	9：00～

時事刻々

祇園祭は８６９年（貞観十一年）に鉾に諸国の悪霊を移すことで穢れを祓うために始まった。その年に東北で貞観地震と呼ばれる大地震が発生した。今年の祇園祭では東日本大震災の犠牲者の慰霊と復興を祈願して行われた。▼一方、昨年から始められた「京の七夕」が８月６日から15.日まで行われる。今回は、京都から東北へ想いを届ける、日本全体の復興のかけ橋にとの願いが込められている。▼同時期に開催される仙台七夕まつりと連携し、会場内に仙台の七夕が飾られ、東北地方の物産展も行われる。▼七夕の笹には子どもたちが願い事を書いた短冊がかけられている。スポーツ選手になりたい。ケーキ屋さんになりたい。といった願いから、被災地の方の幸福や、世界の平和を願うものもあった。▼子供たちの素直な心からの願いを実現させるために、大人たちは何をしているのかと、考えさせられる光景だった。

宗派を超え、世界平和祈りの集い

宗派の垣根を超えて宗教者が平和への誓いを新たにする「世界平和祈りの集い」が８月４日、比叡山延暦寺『一隅を照らす会館前広場』で行われ、国内外から各宗教の代表者ら約９００人が参加し、世界平和と東日本大震災の犠牲者慰霊のために黙とうした。

１９８６年、イタリアに世界の宗教指導者が集い、世界平和への祈りをささげたことを引き継ごうと、天台宗国際平和宗教協力協会が８７年から毎年実施し、今回で２４回目となる。

はじめに、天台宗の半田孝淳座主が、平和のために「自己抑制に努め、許し合い助け合うことだ」と呼び掛けた。続いて、仏教、神道、キリスト教、イスラム教などの代表者が登壇し、「平和の鐘」の音に合わせて世界平和と震災の犠牲者に祈りをささげた。そして、松長有慶高野山真言宗管長・総本山金剛峯寺座主から「平和を語る」が披露された。

本会からは、渡邊恭位理事長、根本昌廣本会外務部長、中村憲一郎京都教会長らが参加した。

終戦６６年目を迎えて

８月７日、平和祈願の日が教会法座席で開催された。今年のテーマは「こころひとつに　明るく・優しく・温かく」。読経供養、説法の後、堂前惠司氏（近畿ブロック青年教務員）より講演があり「東日本大震災で私たちが学ぶべきこと」と題し、善友隊として半月間現地で活動した様子を報告した。現地では支部長、主任の同行をし、会員の安否確認を一軒一軒行なったが、被災者を目の前にして何て声をかければいいのだろうか迷う日々が続き、人に寄り添うことの難しさを感じたという。現地の方が望まれていることを一つ一つさせて頂くことが大事だと述べた。

１５日には戦争犠牲者慰霊の日式典が開催される。

東日本大震災復興祈念集会

７月１６日、支援のまちネットワーク主催による、「東日本大震災復興祈念集会」が立正佼成会大阪普門館において開催され、宗教家や市民など４００名が参加した。

兵庫県立大学の岡田真美子教授による講演では、「無縁社会から結縁社会へ～復興のための合力を！」と題し、現代の硬直した「縁」「しがらみ」から、新たな結縁を結ぶ地域住民のネットワークの大切さを説明。パネルディスカッションでは、立正佼成会・日本基督教団・金光教の復興支援の取り組みを紹介。宗教者としての復興支援のあり方を述べ、人間が持つ「人のために役立ちたい」との思いの発揮により、宗教間の垣根を越えて取り組めると論じられた。

震災ボランティアに参加して～会員の感想～

７月１日～４日にかけて宮城県東松山市へ震災ボランティアに参加させて頂きました。被災された方役立ちたいとの思いを持った会員が全国から集まり、側溝のヘドロ除去や石灰撒き作業をさせて頂きました。

実際に自分の目で津波被害の景色を見た時の言葉にできない無力感と、そこで精一杯生きておられる方々の笑顔が印象的でした。どんな状況でも前を向いて歩き出せる人間の強さを目の当たりにしました。ボランティアさせて頂いたお宅のお父さんと最後に交わした握手の力強く温かい手が忘れられません。

ボランティアに行くことで、自分にとって震災が現実のものになりました。私達にできることを少しずつでも長く続けていきたいと思います。

●まず人さま

（佼成会のことば）

人間はともすれば「自分さえよければ、それでいい」と考え、行動しがちです。その根底には貪欲にとらわれた自己中心、損得中心の心が働いています。その心がある限り、人間は苦悩から解放されることはありません。幸せのキーポイントは人間だれでもが具えている仏性を磨き、「人のお役にたちたい」と願う心を育てていくことです。その修行が「まず人さま」という言葉によって教えられているのです。

この言葉は菩薩の心を端的に表した言葉です。「まず人さま」という思いやりの心を持ち、仏の悟りを求めてよいことを繰り返し実践する人が菩薩です。会長先生はご著書『心田を耕す』の中で「自ら未だ度ることを得ざるに先ず他を度す」（自分はまだ至らない身であっても、人を先に悟りの岸に渡す）と示され、「『先ず他を度す』という喜びが分かると、いま自分が置かれた立場で、精いっぱい人に尽くしていきたいと願うようになります」と教えてくださっています。

この心境になった時、生きがいや無上の幸せを感ずることができるのです。私たちは自己中心的に生きているようでも、心の奥底では人々と喜びや悲しみを共にしていきたいという願いを持っています。「まず人さま」と念じながら行動を起こすことで、自ら心田を耕し、心の奥底にある願いを呼び覚ましていきたいものです。

今月の言葉　～心を磨く～　京都教会長・中村憲一郎

「節電」、「節電」といたるところで叫ばれていますが、皆さんは生活の中でどんな工夫をしてますか？日本人は横一列を好みますが、「節電」に関しては「みんなでやれば怖くない」さながら、結構なことだと思います。風鈴を吊ったり、打ち水をしたり、さざ波のBGMを流したり、冷蔵庫の開閉時間に３秒ルールを作ったり、グリーンカーテンを施したりと、生活に工夫を凝らして今月も楽しく「節電」に努めましょう。わが家も先月の電気代が、前年同月より格段に減りましたよ。努力が実ってうれしいです。

さて今月の会長法話は、「心を磨く」です。会長先生は**「私たちはみな『心を磨き、人格を磨いて人に喜ばれる人間になりたい』と願って、人生を歩んでいる」**と言います。果たして私たちにその自覚はあるでしょうか？残念ながら「否」です。毎日に追われ、目先のことに一喜一憂し、その日が終わる。そんな人生を歩んでいるように思います。が、そんな私でも心の奥底には、**「人に喜ばれる人間になりたい」**という願いは確かにあります。意識に顕在化していないだけです。

その心底の願いを、常に顕在させるにはどうしたらよいか？会長先生は「ご法の習学」をお勧めになります。「ご法の習学」と言っても、ことさら学ぶのではなく、朝夕の読経供養がそのまま心の栄養になるというのです。「学ぶ」は「真似る」に通じ、読経は、仏さまのお心を汲んで、釈尊に倣おう(真似よう)としている行為なのです。読経する時は、こうした自覚が大切なのですね。

さらに会長先生は「心を磨く」とは、と私たちに問いかけます。その上で道元禅師の「仏道をならうというは、自己をならうなり」を引用し、心を磨くとは**「自己をならう」**ことと教えます。この「自己」とは、「仏性(仏さまと同じ性質・心のはたらき)」そのものであり、その真実に気づくことが「自己をならう」つまり「心を磨く」ことであるとし、「本来の自己」にいつも立ち返るために、日々の読経供養をはじめとする「ご法の習学」が大事と説きます。

そうして常に意識していないと、私たちの心は、簡単に愚痴、不平不満、怒りに支配されてしまうのです。法華経に帰依する私たちは法華経の読経を通して人間としての生き方を学んでいますが、心を磨く助けとなるなら、儒教の四書五経やキリストのバイブル、古今東西の名著、あるいは多くの人の心を打つマンガでもいいというのです。ホッとしますね。

それでは経典を読み、心を磨く目的は何か？それは、**人を思いやる温かな人間になる**ことです。８月はお盆と共に広島・長崎に原爆が投下された日や終戦記念日を迎えます。「平和を実現するためには、一人ひとりの心に平和の砦を築くこと」とした「ユネスコ憲章」の精神を今一度かみしめ、一人ひとりが人を思いやれる、やさしく、温かな人間になることを、多くの戦争犠牲者のご霊前に真心からのご供養と共に、お誓いしたいと思います。

ゆめポッケ　～２４４個の真心～

京都教会では、本年も６月より婦人部と少年部を中心に「ゆめポッケ」への取り組みが始まった。
６月１２日の事前学習会では、子供達を中心に総勢２０名が集まり、世界の現状や「ゆめポッケ」の取り組みについて学んだ。また、一人一人が具体的な目標を決めることができた。スペシャルゲストのトリルくんも登場して、たいへん盛り上がった内容となった。

その後、各家庭で「ゆめポッケ」づくりに取り組んでもらい、最終的に２４４個の真心を頂いた。この活動を通して特筆すべきところは、子供達の素直な心と、家族で取り組むという部分だ。一年を通じて、遠い国の子供達のために思いを馳せ、ポッケに入れるものを集めることができ、また家庭の教育とも連動するたいへん意義ある運動だと思われる。今後、「一食を捧げる運動」ともしっかり連動し、婦人部や少年部だけでなく、教会全体の取り組みに発展させていきたい。

実際に本運動に関わった親子の感想を紹介しよう。

娘：

私は１０年前くらいから「ゆめポッケ」に参加しています。まだ小さかったころは「ゆめポッケ」を届ける意味も分かっていませんでした。でも、「ゆめポッケ」は悲しい思いをしたりしている子どもたちに、笑顔を届けるあるんだと知りました。これからも無だづかいしないようにして、たくさんの子どもたちを笑顔にできるように願いをこめて「ゆめポッケ」を作っていきたいと思います。

母：

みなさま、いつも「ゆめポッケ」にご協力頂き、ありがとうございます。３人の子供達は、夏に限らず、年中、「これ、ゆめポッケに入れる！」と言ってくれます。これからも、物を大切に使う心、他人を思いやる心、人様のためにお役に立てる喜びを味わい、豊かな心を育める様なかかわりをさせて頂きたいと思っています。最後にポッケを受け取って下さる子供達の幸せを心からお祈りさせて頂きます。

庭野開祖の宗教観・平和観　「一乗の道」

《励まされ、教えられて》

庭野開祖は、若い頃から比較的順調な人生を送ってきて、まじめに、精いっぱい働いていれば、どこでも認めてもらえ、周りの人に頼られるのがつねであった。ところが、昭和１３年に立正佼成会を創立してからは、様々な試練がのしかかってきた。

脇祖・長沼妙佼先生は、いつもこう言っていた。「会長先生(当時)は、あまりにも人が良すぎますよ。人の言うことをすぐに、もっともだと信じてしまう。そこが困るのです。会が大きくなると色んな人がやってきますが、そういう人に利用されて、今にひどい目に遭うから気をつけなくてはだめですよ」いつも妙佼先生にそう言われて、「気をつけなくては」と考えるのだが、持って生まれた性分で、人の話を聞くとすぐに信じてしまうのである。

「私は人を疑うことができない性分なのだ。それなら、根こそぎ信じてしまおう」と決めてしまうと、腹が座って何でも思い切ってやれる。確かに人間は信じられない一面を持っているだろう。**しかし、信じられる一面のほうを見て善意に解釈していくと、こっちの心がきれいになって、仮にだまそうと思って近づいてくる人がいても、騙せなくなってしまうのではないだろうか。**

政治体制が違い、国情が違い、信じる思想が違っても、地球上に存在する国々は互いに共存していかなければならない相手である。違いは違いとして許容し合い、一致点を見つける努力をしなければならない。そのよりどころになるものが必要なのである。

ソ連訪問の直前、日本商工会議所会頭の永野重雄氏と対談した。永野氏は日ソ間の経済交流に貢献してこられた方だ。庭野開祖は永野氏に尋ねた。「ソ連という国は何を考えているか分からない不気味な国だとか、ソ連の平和戦略に組み込まれないようにして下さいと忠告をして下さる方もおられます。

しかし、心が通い合わなくては、どんなに努力しているつもりでも平和はやってこないでしょう。宗教者は国と国との間に信頼を作り上げるために身を挺する覚悟がなくてはならないと思うのです」。「私も、それと同じ考えなんですよ」と永野氏は、おっしゃって、自分の考えを話された。

「明治維新の前夜、もしも官軍と幕軍が真正面からぶつかったら、日本は壊滅状態におちいったかもしれません。それを救ったのが官軍の西郷隆盛と幕軍の勝海舟の二人です。

今は、さらに大きな規模で米ソがぶつかりあって、このままでは核戦争が始まり、人類は根こそぎ破滅しかねません。**両者の間に割って入る国が必要なんです。そういう立場で両大国にものが言えるのは、世界中に日本しかないんじゃないですか。**

私が日本のお金を何百億も使ってソ連との経済協力を進め、一方、アメリカの第二パナマ運河建設にも協力しているのは、それを通して両国のトップリーダーと会い、**もしも二つの国の間が険悪になった時には、「世界の四十億の人間が不幸になる。人類のために衝突はやめてほしい」と言いにいく役をしなければならないと考えているからなんですよ。**

世界の地図を見ると、ソ連陣営の国とアメリカ陣営の国がたがい違いに位置しているのがわかる。こういう入り組んだ構図になった世界では、どちらも弱音を吐けない。もし弱音を吐いたら、雪崩現象で自分の側についている国が離れていってしまう。

仲間を自分の方に引きつけておくために言いあっている言葉に惑わされてはならない、と永野氏は言われるのだ。さすがに、これまでたびたびソ連を訪れて、ほとんどの要人と会っている人の現状分析だと感心させられた。

さらに永野氏は、**「ここ三年や五年は危険なことは起きないかもしれないが、一旦緩急あれば、庭野さん、一緒に行こうじゃないですか、モスクワへ、ワシントンへ、人類のために戦争はやめてくれと訴えに。政治家の立場では、体制が違うと難しいことがあるけれども経済とか宗教の立場では、体制などにこだわらなくていい。あなたと私と、一緒に行こうじゃないですか」**元気にそう言われた永野氏は、残念なことにその二年年後、帰らぬ人となってしまわれたが、今も庭野開祖の耳に「人類のためになるなら、二人で行こうじゃないですか。モスクワへでも、ワシントンへでも」と言われた永野氏の言葉が、はっきりと残っている。実にスケールの大きい経済人という印象の方だった。

(つづく)

涉外部からのメッセージ

先日、某テレビ局で今の原発問題についての討論会があり様々な立場の方の意見がありました。元原子力発電所設計担当者が今の政府の対応の遅さや炉心の状態の説明をした際、「どうしてあなた方専門家が力を合わせて解決の状態に持っていかないのか」という質問がありました。我々自身も身の回りの現状に愚痴をこぼしたり批判したりしていないか、人々と協力し合って精一杯の努力をしているかを考えさせられました。

この月報を読まれて感想などがありましたらお気軽にお寄せ下さい。　RKK京都教会　FAX 075-762-2266